

金剛寶戒寺便

<https://www.houkaiji.jp>

令和五年十一月一日発行 第一一六号

檀信徒の皆様こんにちは。金木犀の香りが別れを告げ、秋の虫の音が響くようになりました。皆さま夏の疲れなど出ていませんでしょうか。

十月十四日（土曜日）前日から急に降水確率が上がり八十パーセント。まだまだ金木犀が香る中、天候ばかりが心配でしたが上棟式が無事に終わりましたことをご報告申し上げます。式の後のお餅まきには百名以上の方々にご参加を頂き、曇り空ではありませんでしたが、盛会のうちに終わり安堵致しております。

今回の上棟式は、私が導師を勤めさせて頂きました。式の時には大座敷となる部屋に椅子を並べ、総代様や工事関係者の方にも座って頂きました。中央に通路を作っても両サイドに四席以上の椅子を並べることが出来ず。縦には最大、十列は並べられますので、詰めれば八十人前後は部屋に入ることが出来ます。これだけに入れば、近年の法事や葬儀には十分ではないかと思えます。他にも様々な用途で利用したいと思っておりますので、皆様からもアイデアもお聞かせください。

さて、十月の講習会では井出悦郎さんの「これからの供養のかたち」を参考に、ご供養について、私見も挟みながら話をさせて頂きました。著者の井出悦郎さんは東大文学部

を卒業後、大手銀行や「ベンチャー企業、コンサルティング会社勤務の経歴を経て、現在は「これからの人づくり」に重要性を見出し、お寺と人々をつなぐポータルサイト「まいてら」の運営をしています。ですので、供養の大切さを説くのは必然と思われるかもしれませんが、筆者自身も生後二カ月の長男を失った経験があり、喪主としての立場からの体験談が本書には織り込まれています。また、各宗派で活躍されている僧侶の言葉や、井出悦郎さんのお人柄が行間からも感じ取られ、読み物としてもお勧めが出来ますので是非一度、手に取ってみてください。必要であれば貸し出しも致します。

皆さんは葬儀やご供養と言うと、亡き人の死を悼み、故人の霊を慰め冥福を祈る為だけのものと思われるのではないのでしょうか。一義的にはその通りですが、同時に供養をする人々の為にもこれらの儀式は存在していることを私は実体験として知っています。

故人を送る側の立場によって大小の差はありますが、供養を通じて死を受け入れ、悲しみを共有したり、また生前には知ることのなかった亡き人の一面を知ることが出来ます。これらは精神衛生上のグリーフケア（孤独感や絶望感からの立ち直り）になります。

また、葬儀だけでなく月参りや法事などの節目は、自分自身を振り返る自省心の時間にもなります。先祖供養は、自分一人で生きて

いるのではなく、周りから生かされている事への気づきとつながり、感謝の心を芽生えさせます。これらは心の成長にとって不可欠な過程とも言えます。そして大切な故人との誓いは、生きている人との約束以上にその実行力を伴うことも多々あります。

供養を押し付けする気は全くありませんが、貴重な時間とお金を使ってご供養をするのであれば、これらの事を念頭に手を合わせて頂くとより充実した供養になると思います。

そして巻末に筆者より問いかけがあります。

- ①あなたにとって先祖とはどのような存在で、今後もどのようなつながりたいたいですか？
- ②あなたは家族など親しい人をどのように送り、供養したいですか？
- ③あなたは死後どのように送られ、供養されたいですか？そしてどのような先祖として記憶されたいですか？

皆さんも少し考えてみてください

講習会のご案内

十二月八日（金曜日）十四時より

金剛宝戒寺本堂において「法話の会」

悩み、苦しみ、憤りなどありましたら是非講習会に参加してみてください。少しでも心が軽くなるかもしれません。

最後に今月の一句です。

棟を上げ 木犀添えて 餅を撒く

合掌